

テル・アイン・エル・ケルク遺跡からみる親族関係

著者	宮内 優子
雑誌名	筑波大学先史学・考古学研究
号	24
ページ	1-31
発行年	2013-03
その他のタイトル	Consideration of kinship at Tell Ain el-Kerkh, Syria
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123550

論文

テル・アイン・エル・ケルク遺跡からみる親族関係

宮内 優子

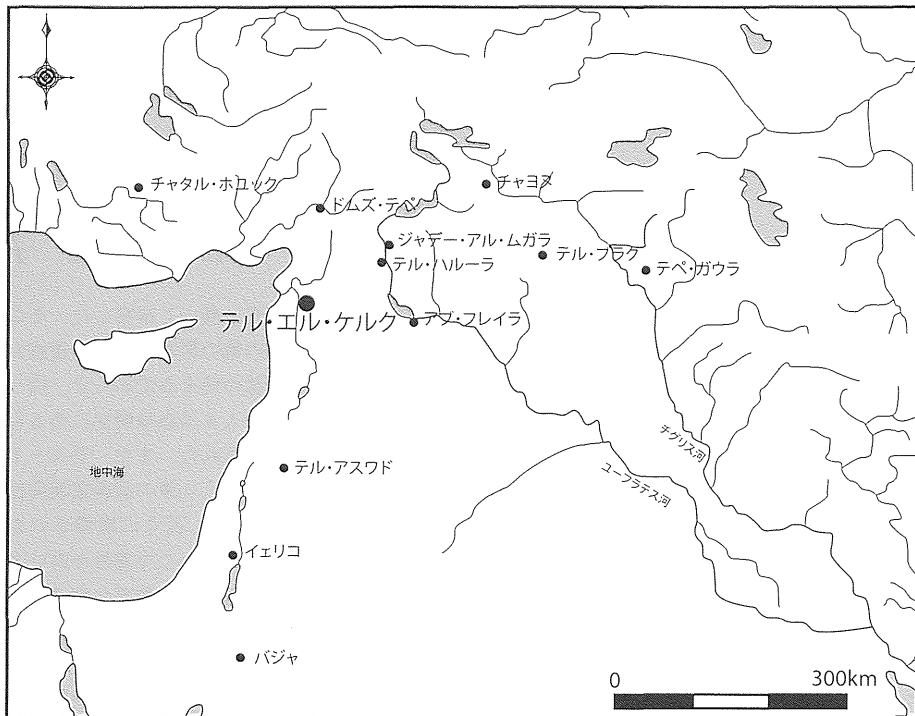
シリア北西部のテル・アイン・エル・ケルク遺跡からは、土器新石器時代の埋葬が240体余り発見された。その中には一か所に複数の遺体を埋葬する「人骨集中区」と呼ばれる合葬墓の一形態も含まれており、当時の親族関係を復元する大きな手がかりになると思われた。そこでまずは人骨集中区を墓地全体の中に位置づけるための分析を行い、人骨集中区内に埋葬された人数は人骨集中外に埋葬された人骨とほとんど変わらず、また性別と年齢にも顕著な偏りはないことを明らかにした。年齢や性別に偏りが無いことはその墓地が集落全体の共用墓地であった可能性は高く、また同じ場所に長い時間をかけて埋葬を行うという合葬墓は血縁を意識して埋葬が行

われた可能性が非常に高いと推察した。そこで、西アジア地域の他の新石器時代の遺跡から発見された合葬墓の例をみていくと、同一住居内に埋葬された人々は血縁関係にある可能性が高いことが示された。また、テル・アイン・エル・ケルク出土人骨の炭素窒素同位体の分析データからは、近くに埋葬された人々は同じ食物を食べていた可能性が高いことも示唆された。ここから合葬墓に埋葬された人々は親族関係にあるという仮定を立て、埋葬順が明らかである第10人骨集中区を例に家系の復元を試みた。その結果、当時の家族の規模が4～6人ほどであり、またこの合葬墓が60～100年にわたり利用されたものである、という推論を立てることができた。

I. はじめに

西アジアの新石器時代は、狩猟採集社会から農耕・牧畜を行う定住社会へと社会の構造が大きく変容した時代であった。「新石器革命」呼ばれるこれらの変化により社会は次第に複雑化し後の都市・国家へと繋がっていった。このような時代において、社会を構成する一要素である親族関係はどのように機能していたのであろうか。

親族関係は単なる嫁入り・婿取りの婚姻関係やメンバーシップ、親族名称を規定するだけでなく、地位や財産をはじめとした諸権利の継承とも密接に関わるものである（ラドクリフ＝ブラウン 2002）。したがって、親族関係の分析は当時の社会構造を理解する上で極めて重要である。しかし、西アジアの新石器時代においては親族関係についてこれまで研究があまり進められてこなかった。それは親族関係を類推する上で有用な文字資料が無いことと、考古資料のみでは血縁関係の推定を行うことが極めて困難であることにも起因するであろう。また、親族関係を考察するためにはある一定数以上の埋葬事例が必要である。さらに言えば、それらが遺跡内に散在しているのではなく、ある程度のまとまりをもって偏在している場合が望ましい。これらの条件を満たす埋葬例は多数発見されているが、分析は性別と年齢の推定にとどまっている。

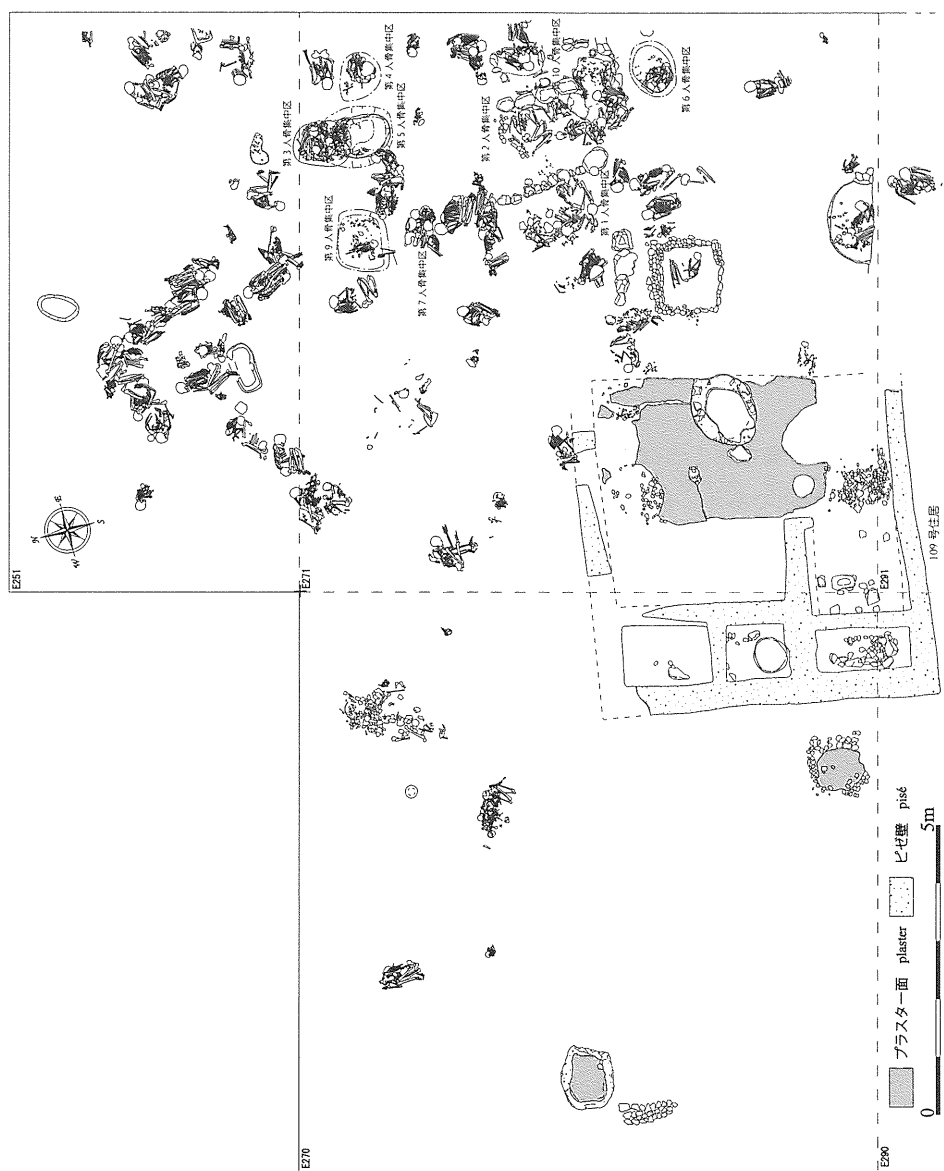


第1図 本稿で言及する遺跡

親族関係の研究では分子生物学的研究手法が大変有効であるが、新石器時代などの古い時代の骨は遺存状態が悪く、DNAなどのサンプルの採取が極めて困難である (Baca and Molak 2008)。このため、新石器時代の親族関係に関する研究は、なかなか進展していないのが現状である。分子生物学的と同様に親族関係を類推する上ために重要な形質人類学的分析も、性別と年齢や病変の鑑定以外行われていないことが多い。

生物学的な親族関係を明らかにする研究とは異なり、家族形態に関する研究としては住居を単位とした世帯規模の研究が多数行われてきた。住居の規模やプランの分析から、先土器新石器時代B期までの世帯は核家族であった (Banning and Byrd 1987; Byrd 2000) が、先土器新石器時代B期の後期から土器新石器時代の初めにかけて拡大家族へと規模が拡大していったことが指摘されている (門脇 2009)。

本稿では、シリア北西部のエル・ルージュ盆地に位置するアイン・エル・ケルクの土器新石器時代墓地から出土した埋葬人骨を主な研究対象とする。2007年の調査で中央区から発見された土器新石器時代の墓地からは、これまで240体を超える人骨が約200m²の範囲から出土した (第2図)¹⁾。これら大量の人骨が出土した範囲からは1軒の住居を除き他に遺構は検出されておらず、集落内の空いた戸外スペースを利用した埋葬専用の空間であったと考えられる (Tsuneki 2010)。埋葬例の中には10体以上の人骨をまとめて埋葬した合葬墓もみられ、当時の親族関係を推測する上で有用な資料となる。



第2図 テル・アイン・エル・ケルクの土器新石器時代墓地
(筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団 2011: pp. 4-5 を一部改変)

本稿ではこの内、形質人類学者により性別と年齢の鑑定が行われたおよそ 200 体を分析対象とする。その中でも、特に親族関係を有する可能性が高いと思われる合葬墓を中心に分析を進めていく。人骨の年齢・性別等の形質人類学的同定は、テル・エル・ケルク発掘調査団員のショーン・ドーティ氏 (S. P. Dougherty) によるものである²⁾。

まずはそれぞれの埋葬の特徴をとらえるために、墓地全体を合葬墓の一形態である「人骨集中区」と「人骨集中区以外」という 2 つの大枠に分類し、その中でそれぞれ「性別」「年齢」「副葬品」「一次葬と二次葬の割合」「頭位方向」「顔の向き」「埋葬姿勢」の 7 つの項目について傾向を探る。そして得られた結果の傾向を比較し、墓地における埋葬の特徴を明らかにする。ここでの「頭位方向」とは主軸（頭から足を通る直線）に対して頭がある方角、「埋葬姿勢」とは一次葬の体位を指す³⁾。そしてアイン・エル・ケルクの墓地における埋葬の特徴を明らかにすることにより、当該遺跡の社会における親族関係についての考察を試みたい⁴⁾。

Ⅱ. テル・アイン・エル・ケルク遺跡の墓地における埋葬

1. 人骨集中区

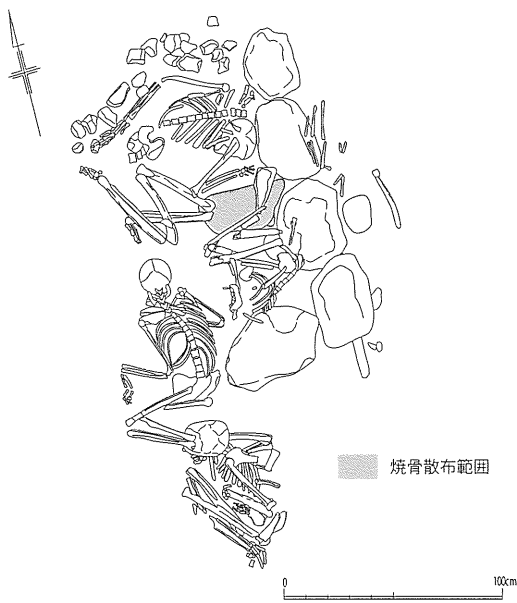
本稿における「人骨集中区」とは、「1 つの土坑や石列で区画された範囲に複数体の人骨を埋葬する」という葬法であり、合葬墓の一形態である。「人骨集中区」と一括りに言っても 1 つ 1 つが実に様々な特徴を持つため、それぞれの埋葬方法の違いに基づき、以下に述べる 4 形態に分類した。①一次葬が中心のもの（第 2・7・10 の北側の人骨集中区）（第 3 図）、②集骨葬が中心のもの（第 1 人骨集中区）（第 4 図）、③集骨葬と焼骨が混ざっているもの（第 3・4 人骨集中区）（第 5 図）、④火葬土坑（第 5・6・8・9・10 の南側の人骨集中区）（第 6 図）。第 10 人骨集中区は南北 2 つの集積の性格がそれぞれ全く異なっており、北側の集積は①の一次葬を中心とした合葬墓である。そして焼骨が中心の南側の集積は④の火葬土坑である⁵⁾。各集中区から出土した人骨に関する詳細は第 1 表を参照されたい。

（1）年齢と性別

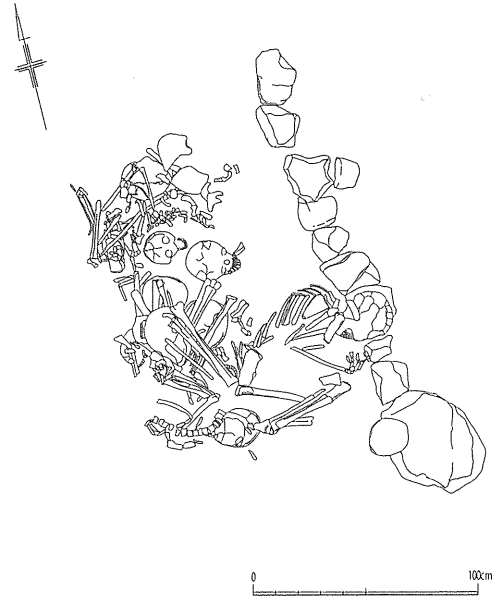
集中区に埋葬されていた人骨は、およそ 100 体であった。それらは多数の骨が積み重なっているため個人の判別が困難であり、また骨の保存状態が悪く性別や年齢を判断出来ないものも多い。およその年齢が判定出来たものをみると、成人と未成年の比率は約 3 : 2 で成人の方がやや多い。成人の中でさらに細かい年齢が推定出来たのは全体の 3 割程度であり、全体の傾向を推し量るのは難しいかもしれないが、人骨集中区に埋葬された人々の性別・年齢構成に偏りはないようである（第 7 図①、第 8 図①）。しかし、集中区を埋葬方法の違いにより 4 つに分類すると、性別と年齢によって選別が行われていた可能性がうかがえる（第 9 図）。

（2）方角と埋葬姿勢

集中区全体では、頭位と顔の向きに顕著な偏りはみられない。ただし方角が多く判明してい



第3図 第2人骨集中区



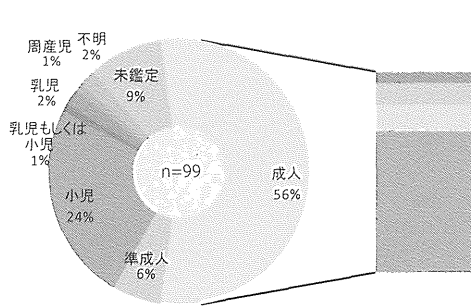
第4図 第1人骨集中区



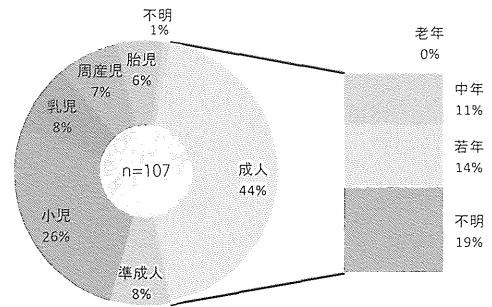
第5図 第3人骨集中区



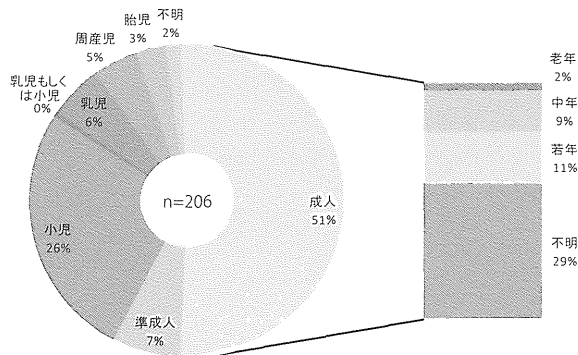
第6図 第5人骨集中区



① 人骨集中区における年齢

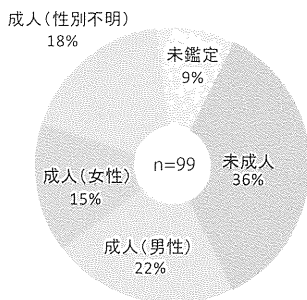


② 人骨集中区外埋葬の年齢

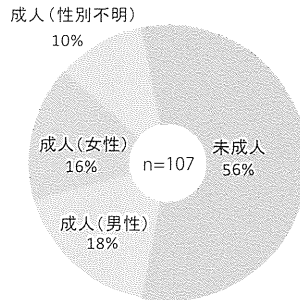


③ 墓地全体の年齢

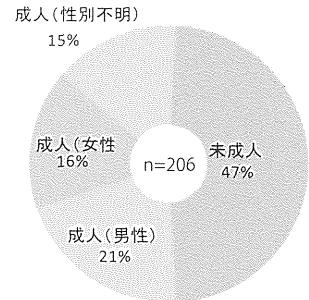
第7図 埋葬人骨の年齢



① 人骨集中区における性別

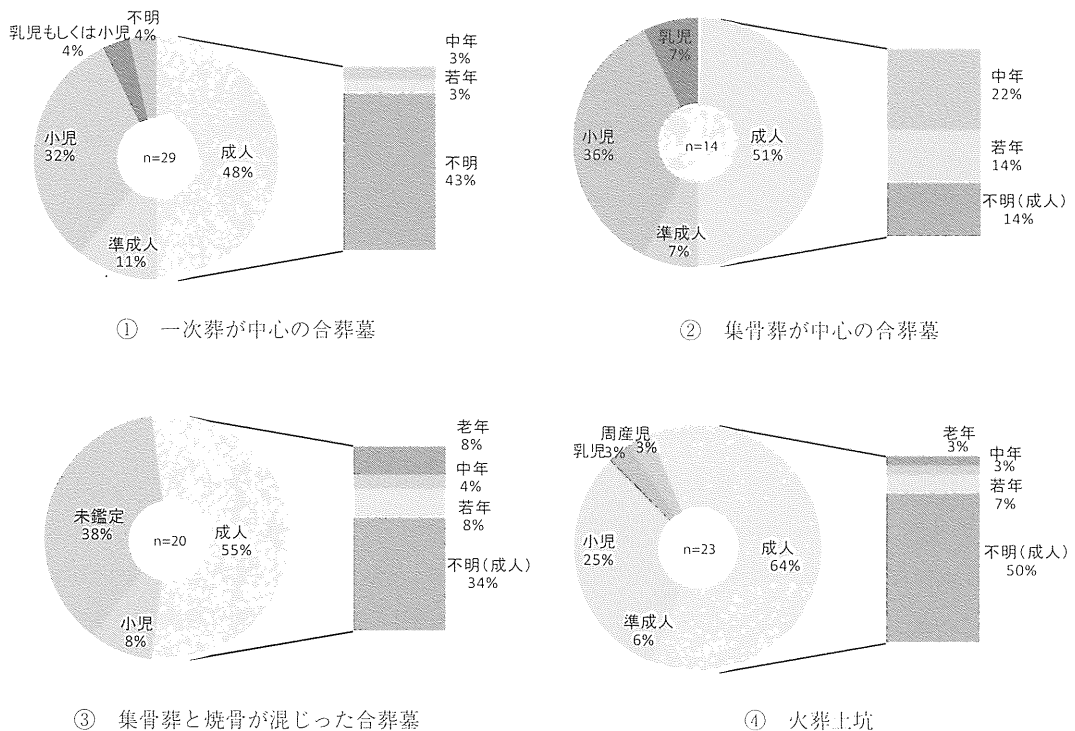


② 人骨集中区外埋葬の性別



③ 墓地全体の性別

第8図 埋葬人骨の性別



第9図 集中区のグループ①～④における年齢

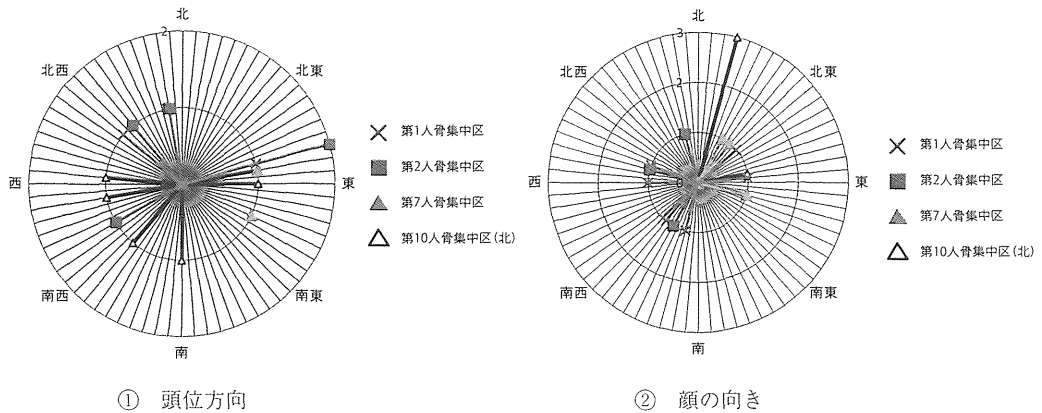
る第1・2・7・10（北）人骨集中区では、それぞれの集中区の中で頭位と顔の向き方角が若干偏っている（第10図）。

姿勢の判明しているものは全て屈葬であった。サンプルの数が少ないが、頭位・顔の向き・主軸には集中区全体としての偏りはみられない。しかし各集中区内では頭位と顔の向きに方角に幾分かの傾向がみられる。埋葬姿勢に関しては、伏臥の割合が比較的高いという特徴がみられた。

（3）副葬品

人骨集中区内から検出された副葬品は集中区外と比べると種類も数も少ない。副葬品のほとんどは一次葬が主体の第2・7・10人骨集中区の一次葬に副葬されたものであった。第5・6・8人骨集中区からもそれぞれ副葬品は出土しているが、それらは個人へというよりも、その集中区全体へ供したと思われるものが多い。集中区において特徴的なのは、暗色磨研土器の副葬である。暗色磨研土器の副葬は第5・6・7・10人骨集中区でみられた。集中区以外でも832号人骨・927号人骨・1058号人骨で暗色磨研土器の副葬がみられるが、1058号人骨と第7人骨集中区以外は全て特定の個人ではなく、人骨の集積全体へ向けて供えられた品である。

集中区全体に帰属する副葬品がみられた第5・6・8・10（南）人骨集中区を除いた7つの集



第10図 第1・2・7・10人骨集中区における頭位・顔の向き

中区の副葬品を分析すると、成人のおよそ4分の1に副葬品が認められた。一方、小児以上の未成人では約5分の1にのみ副葬品が共伴した。

性別に基づく副葬品の有無は、男性では18体中4体にみられたが女性では11体中2体のみであった。最後に埋葬姿勢でみると、副葬品がみられた19体の内16体が一次葬であった。以上の分析から、副葬品は成人の男性の一次葬に多いという傾向がみられた。

2. 人骨集中区以外の埋葬について

人骨集中区以外への埋葬は合わせて107体みられ（第2表）、その人数は集中区とほぼ同じである。一次葬の単体葬が全体の7割を占め、81体みられた。多体葬は2例（748号人骨・927号人骨）、集骨葬は17体みられた。一次葬は全て屈葬であり、伸展葬は全くみられない。屋外の土坑への埋葬がほとんどであるが、中には住居間の通路への埋葬（924号人骨）や住居内の床下埋葬など住居に関連した埋葬も見受けられる。住居に関連した埋葬は周産児から中年の成人までの幅広い年齢層にみられ、男女もほぼ同数みられる。性別や年齢による墓域の違いなども認められない。しかし乳幼児に限り、土器を埋葬に利用する例が3例発見された。乳幼児に被せられていた土器は、アイン・エル・ケルク出土土器で高い割合を占める暗色磨研土器であり、日常的に用いられていた土器が埋葬に転用されていたことがうかがえる。

（1）性別と年齢

集中区外に埋葬された人々の年齢と性別をみると、未成人が6割弱を占め、集中区に比べると未成人の方がやや多いといえる（第7図②）。準成人と小児の割合は集中区と変わらないが、乳児以下は集中区外からの出土数が多い。性別が判明しているものをみると男女の数に偏りはみられない（第8図②）。

(2) 方角と埋葬姿勢

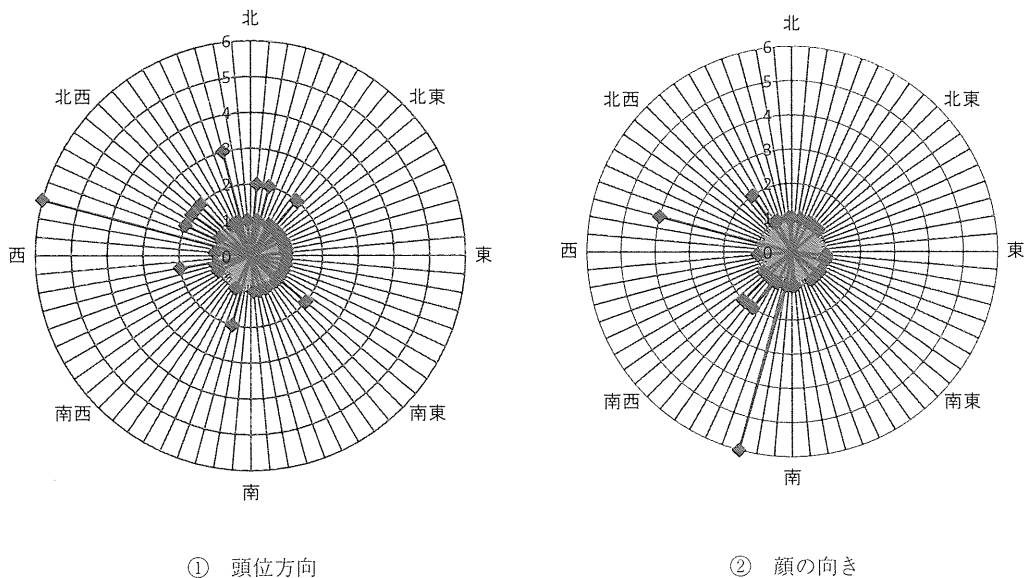
頭位と顔の向きの方角と、埋葬姿勢が判明したのは全体の約半数である。頭位方向は東西軸がやや多く全体の約3割を占める。顔の向きは全体では偏りがみられないが(第17図)、性別と年齢に分けると以下のような特徴がみられる。

まず性別で分けると、男性は南西・北西・北東が多いが、反対に女性は北東・南東・南西が多い。それは特に若年の成人において顕著にみられる。中年になると男女で違いはみられなくなる。次に年齢で分けると、準成人には偏りはみられなかったが、小児は北・東・南が多く、女性と重なる部分が多い。乳児以下は男性と同じく南・西・北にかけての方角が多い(第12図)。

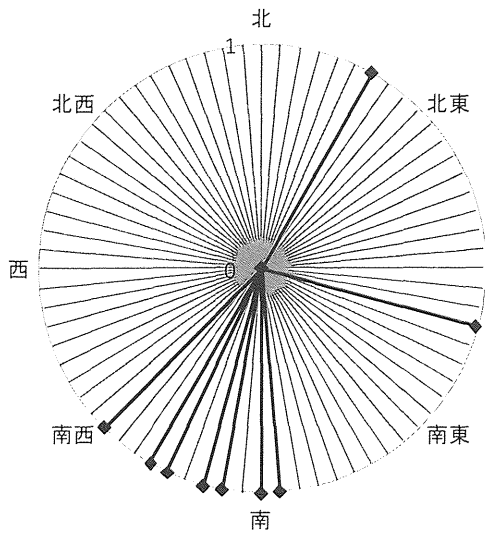
埋葬姿勢が判明したものは全て屈葬であった。左側臥と右側臥がそれぞれ約4割を占め、次に多いのが伏臥で約1割である。仰臥はごく僅かであった。

(3) 副葬品

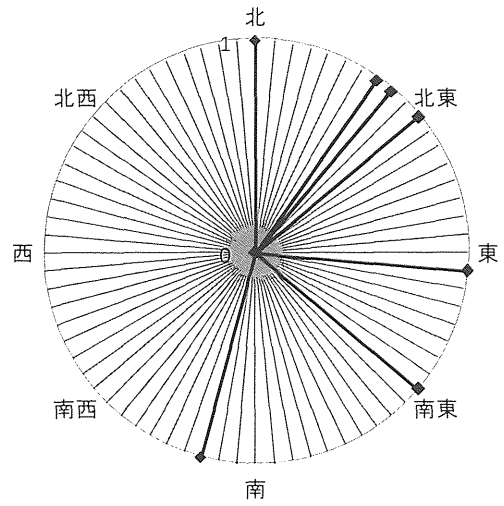
副葬品がみられるのは全107体に対し28体であり、個人ではなく人骨の集積に供せられた副葬品も4例みられる。集積全体へ向けた副葬品がみられた4例(=13体)を除くと、成人は性別に関わらずおよそ半数に副葬品が共伴するが、未成人は1体の例外を除き、小児以上の4分の1にしか副葬品は共伴しない、という傾向がみられる。集中区外では、副葬品は一次葬の成人に出土する場合が最も多い。



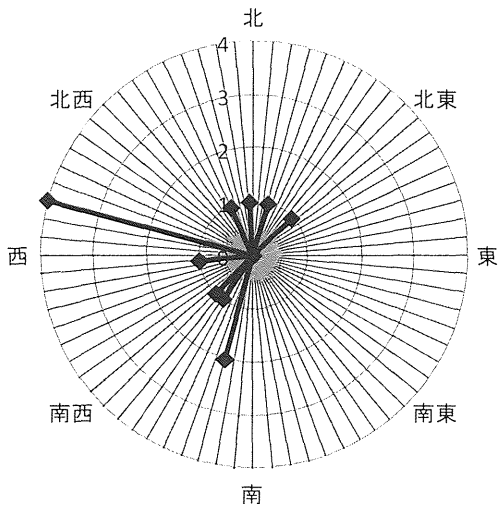
第11図 人骨集中区外における頭位・顔の向き



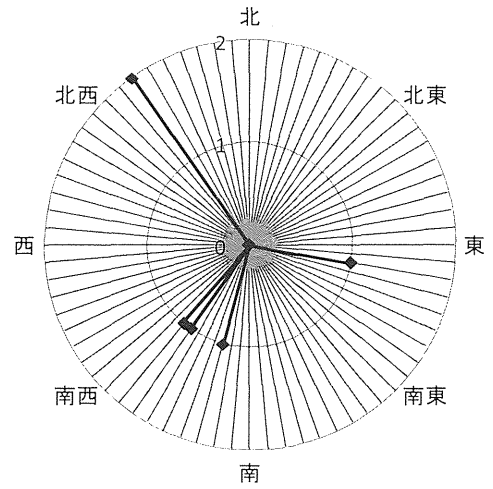
① 成人女性



② 小児



③ 成人男性



④ 乳児以下

第12図 人骨集中区外埋葬における顔の向き

3. テル・アイン・エル・ケルク遺跡の墓地における埋葬

ここまで墓地全体を「人骨集中区」と「人骨集中区外」の2つに分けて分析を行ってきたが、これら2つをまとめてアイン・エル・ケルクの土器新石器時代の墓地についての総括を行う。

(1) 年齢と性別

墓地から出土した全人骨の年齢と性別をみる。まず年齢は未成人と成人がほぼ同数であり、差がみられない(第7図③)。老年の人骨がほとんどみられないことは、彼らの平均寿命が50歳に達していなかったことを示すと思われる(ドーティー 2011)。未成人は小児が最も多く、埋葬人骨全体の約4分の1を占める。小児の高い死亡率は近代以前にはよくみられる傾向であるが、当時の生活環境や栄養状態の厳しさを反映しているように思われる。

次に性別をみると、男性の方がやや多いように見受けられる(第8図③)が、被葬者の性別や年齢は明確な差異がみられなかったため、この墓地はアイン・エル・ケルクで暮らしていた人々の共用墓地であった可能性が高いと考えられる。しかし、人骨集中区の中には明らかに成人が多いものがあるため、一部では年齢により埋葬方法が選択されていた可能性が考えられる。

(2) 方角と埋葬姿勢

頭位と顔の向きの方角と埋葬姿勢が判明したのは全体の4割ほどであった。まず、頭位方向には方角による顕著な偏りはみられなかった。しかし、方角を南北軸・東西軸・北東・南西軸・北西・南東軸という4つの大きな軸に分けてみると、東西軸にやや多いという傾向がみられた。また、人骨集中区ごとに比較を行うと、それぞれの中で若干の偏りがみられるため、集中区の中では方角の統一が図られていた可能性がある。

次に、顔の向きは性別によって若干の偏りがみられた。女性は北東・南東・南西にかけての方角に、そして反対に男性は南西・北西・北東の方角への偏りがみられる。年齢による偏りはない。

最後に、埋葬姿勢の判明したものは全て屈葬であった。左側臥と右側臥が同程度みられ、全体の8割を占める。伏臥と仰臥は側臥に比べると極めて少ない。

(3) 副葬品

副葬品には「個人に供されたもの」と、「複数体の人骨の集積へ供されたもの」の2種類が存在する。第5・6・8・10(南)人骨集中区では集積全体へ供された副葬品が確認され、集中区以外でも集積全体に供された副葬品が4例みられた。墓地全体からみられる副葬品の傾向としては、以下の3点が指摘される。1点目は、副葬品は成人に多くみられるという点。2点目は、副葬品は未成人の中でも小児以上に多くみられるという点。そして3点目は男性に副葬品が多い、という点である。仮に副葬品が当時の社会的地位を表すのだとすれば、年齢と性別による区別が少なからず存在した可能性が指摘される。

4. 墓地内埋葬の総括

アイン・エル・ケルクの墓地から出土した埋葬をみると、埋葬された人数は人骨集中区とそれ以外を比較しても大きな差は確認できない。また、性別・年齢による偏りはみられず、この墓地は集落の共用墓地であった可能性が高いことを指摘できる。人骨集中区外では墓域ごとに性別や年齢の違いなどを認めることは出来なかったが、人骨集中区ではいずれも発掘区の一部に偏って分布している（第2図）。分布の偏りからは、集中区は墓地の特定の場所に築かれていた可能性が考えられる。

Ⅲ. テル・アイン・エル・ケルク遺跡の墓地からみる親族関係

1. 西アジアの他の遺跡にみられる合葬墓

西アジア新石器時代の埋葬は、土坑への一次葬の単体葬が最も一般的である。しかし、アイン・エル・ケルクの土器新石器時代の墓地をみると、一次葬の単体葬と同等の頻度で集中区への埋葬が行われている。このことから、同じ場所に敢えて複数体分の埋葬を行うという行為には、特別な意味があると考えられる。

複数体の人骨が一ヶ所から出土する可能性は大きく2つ挙げられる。1つ目は短期間で大量の埋葬が行われた場合。そして2つ目は長期間にわたって同じ場所に埋葬が繰り返された結果、大量の人骨が一ヶ所に集まった、という場合である。複数体分の遺体を一ヶ所に埋葬するという葬法は新石器時代全体を通じてみられるが、主流の葬法ではない。ここでは他の遺跡から検出された合葬墓と思われる事例をいくつか挙げていき、アイン・エル・ケルクの人骨集中区と比較してみる。

（1）短期間で形成された合葬墓

埋葬が短期間で行われた合葬墓をみる上で重要となるのは、それぞれの埋葬状態である。もし一次葬が多ければ、埋葬された人々がそれほど時間をおかずに死亡したと推測され、戦争や災害、疫病など一度に大勢の人が亡くなる出来事があった可能性が指摘される。

新石器時代の遺跡では例えばイエリコ、アブ・フレイラ、テペ・ガウラより、短期間で形成された合葬墓が発見されている。

イエリコ

イエリコの先土器新石器時代A期の「塔内埋葬」では、塔の通路の一部1.8m×0.7mの範囲に12体の人骨が全て一次葬の状態で埋葬されていた。性別は男女ともにみられ、成人と未成人のいずれも含まれている。発掘者のケニヨン（K. M. Kenyon）は戦いによる犠牲者だと解釈しているが（Kenyon 1981）、カイト（I. Kuijt）は塔という特殊な施設内に埋葬されていたことから、祭祀的意味合いが強いと主張している（Kuijt 1996）。

アブ・フレイラ

先土器新石器時代 B 期にあたるアブ・フレイラでは、トレンチ B 第 8 フェーズの住居の room 2 床下から 25 ～ 30 体の人骨が出土した。土坑の直径は 1.6m × 1m で深さは 70cm ほどあり、硬いプラスターの床を掘りぬいていた。埋葬後は蓋として薄くプラスターが貼られていた。土坑が利用されたのは短期間であり、埋葬は一度に行われたとみられる。集骨葬の合葬墓であり、埋葬される前にすでに白骨化していたと思われる。埋葬されていたのは約 6 割が未成人であり、成人の年齢は提示されていないが、概ね若かったようである。また、性別は男女共に含まれていた。副葬品はビーズ数点と骨製のポイントが出土した。白骨化した後に埋葬されていたとみられる点から、ムーア (A. M. T. Moore) らは白骨化が葬送儀礼の最終段階であって、この合葬墓は全ての葬送儀礼が終わった後の最終的な埋葬場所だったのではないかと解釈している。さらに、被葬者の中で何人かは血縁関係のある可能性が高い、と形質人類学的に推測されることから (Molleson 2000)、いくつかの世帯が共同で埋葬されているのではないかと推察している (Moore and Molleson 2000; Molleson 2000)。

テベ・ガウラ

テベ・ガウラ (Tepe Gawra) のプレ・ハラフ期では、使用されなくなった井戸から 24 体にも及ぶ人骨が出土した。埋葬は 4 つの時期に区分されるが、それほど時期差は無かったとみられる。性別は男女ともにみられたが全て成人であった。出土状態から、遺体は中に投げ込まれたのではないかと推測されている。井戸に大量の人骨が埋葬された理由についてトブラー (A. J. Tobler) は戦死者と疫病による死者という 2 つの可能性を提示したが、いずれも明確な証拠がないため断定は避けている (Tobler 1950)。

(2) 長期間で形成された合葬墓

長期間で形成された合葬墓とは、同じ場所に埋葬が繰り返されることによって大量の人骨が一か所に集まった埋葬事例を示す。アイン・エル・ケルクから出土した合葬墓のほとんどはこちらに該当する。長期にわたって同じ場所に埋葬を繰り返すことは、「場所」と「誰を埋葬するか」、ということを強く意識していたと考えられる。その意識の中には血縁関係・親族関係も含まれていた可能性も十分に有りうる。

バジャ

先土器新石器時代 B 期後半のバジャ (Ba'ja) からは、住居の床下から複数の合葬墓が発見されている (Gebel and Hermansen 2000, 2001; Gebel et al. 2006)。1 つの合葬墓に埋葬されている人数は 10 体前後、また成人と未成人の割合はおおよそ半々であり、集骨葬が中心の合葬墓である。アイン・エル・ケルクの合葬墓と非常に似た特徴を持つ。最初に埋葬された骨は、後の埋葬の際に横に動かされた形跡がみられる。ゲベル (H. G. K. Gebel) らは、この合葬墓に埋

葬されている人々はその住居に暮らしていた拡大家族だと解釈している (Gebel et al. 2006)。

ジャデー・アル・ムガラ

先土器新石器時代 B 期のジャデー・アル・ムガラから出土した埋葬例はそのほとんどが「死者の家」(Maison de Morts) と呼ばれる遺構から出土した。この遺構は 4 つの小部屋から成り、埋葬専用の建物であったと思われる。中からは少なくとも 38 体が出土し、子供と若い成人の割合が多くみられた。一次葬と二次葬の両方が出土したが、この違いに対しコックニユー (E. Coqueugniot) はジャデー・アル・ムガラで暮らしていた人々は半遊牧民であり、一次葬は集落内で死亡した人、そして二次葬は遠方で死亡した遺体を白骨化させた後必要な部位だけを持ち帰って埋葬した結果である、と区別した (Coqueugniot 1999)⁶⁾。

テル・アスワド

テル・アスワド (Tell Aswad) の先土器新石器時代 B 期後半の Burial 671 からは、少なくとも 10 体が埋葬された合葬墓が発見された。埋葬は 6 段階にわたって行われたとみられ、最初と最後の埋葬が一次葬であるが、他は集骨葬である (Stordeur et al. 2006)。

アブ・フレイラ

アブ・フレイラでは、トレンチ B 第 8 フェーズの住居の room 3 (通称 “Charnel Room”) から少なくとも 24 体分の骨が集積している状態で発見された。年齢は成人が約 8 割を占めていた。ムーアらはこの部屋が白骨化するまで遺体を保管しておく遺体の仮置き場だったのではないかと推測している。この部屋から出土した人骨は、同じ住居の room2 から検出された Pit 144 に埋葬されていた人骨と似た形質人類学的特徴をもつとみられ、アブ・フレイラでは、血縁関係を持つ人々同士を同じ場所にまとめて埋葬していた可能性が高いと指摘されている (Moore and Molleson 2000; Molleson 2000)。

チャヨヌ

南東アナトリアにある先土器新石器時代 B 期のチャヨヌで発見された Skull Building と呼ばれる特殊な遺構からは、一次葬と二次葬合わせて 400 体以上の人骨が出土した。円形プランをもつ遺構の上に方形プランを持つ遺構が建てられており、円形プランの遺構内からは、一次葬と二次葬が大量に埋葬されている土坑が 2 つ検出された。上の方形プランの遺構は複数の小部屋と 1 つ大部屋から成っており、頭蓋骨の集積や長骨の集積、そして要らない部位をまとめて廃棄したような骨の集積がみられる。頭蓋骨は少なくとも 71 体出土し、性別と年齢に偏りは認められなかった。大部屋の床にはプラスターが貼られ、壁は赤く塗られていたと思われる。壁にそって低いベンチが作られ、中央には磨研された大きな平石板が置かれていた。石板の表面からは人間と動物の血液が検出され、頭蓋骨崇拜に関わる祭祀が行われていたのではないかと

と推測されている (Özbek 1988; Özdoğan 1999a, b)。

チャタル・ホユック

中央アナトリアに位置するチャタル・ホユック (Çatalhöyük) の土器新石器時代では、埋葬は基本的に住居内の端に設けられたプラットフォームの下に行われていた (Mellaart 1962)。しかし胎児だけは住居内の炉の近くに埋葬されており、埋葬場所の区別が成されていた。葬法は単体葬と多体葬があり、一次葬が多く二次葬は少ない (Andrews et al. 2005)。何度も追葬が行われ、住居 1 棟に埋葬される人数は 1 人から 40 人以上と極めて幅が広い (During 2003)。

住居内に埋葬された人々における血縁関係については、形質人類学からの分析が行われている。骨の形態的小変異からは近接した住居に埋葬されている人々に血縁関係が推定された (Molleson et al. 2005)。しかし、歯の計測的・非計測的特徴からは、同一住居内に埋葬された人々の歯には強い近縁性が認められず、血縁関係にある可能性は低いという結果が得られている (Pilloud and Larsen 2011)。ピロード (M. A. Pilloud) らはチャタル・ホユックの居住者は集落外の者と婚姻していたと想定し、当時のチャタル・ホユックは血縁によって紐帯を高めていた社会ではなく、独立した個々の住居が基盤となった社会だった、と推察した。

2. テル・アイン・エル・ケルク遺跡の合葬墓の考察

様々な遺跡から検出された合葬墓の事例をみると、同じ場所に埋葬されている人々には血縁関係がある、という結果が示された。また、合葬墓ではないが、先土器新石器時代 B 期のテル・ハルラ (Tell Halula) では、同じハプロタイプをもつ人々が同一住居内に埋葬されていたことがミトコンドリア DNA の分析によって明らかになった (Fernandez et al. 2008)。この分析結果からは、家族は同じ場所に埋葬されていた可能性は極めて高いと指摘される。以上から、「人骨集中区」という同じ場所に埋葬された人々にも血縁関係がある可能性が高いのではないかと、ということが仮定出来る。

また、アイン・エル・ケルク出土人骨の同位体分析を行った板橋氏によると、炭素・窒素安定同位体分析の結果、集団内で食べていたものが若干異なる傾向にあることが示された⁷⁾。分析からは、近接して埋葬されている人々は同種類の食物を摂取していた可能性が高いということも指摘された。第 1・8 人骨集中区の人骨についても分析が行われ、それぞれ人骨集中区内で近い値を示した。同じ物を食べていたということは、彼らが生活をともにしていた家族であった可能性は高く、アイン・エル・ケルクの人骨集中区に埋葬されていた人々に血縁関係が存在していた可能性はますます高くなる。

第 1・8・10 (北) 人骨集中区は、成人と未成人の数がほぼ等しく、性別による偏りもみられない。一方、第 3・4・5・7・10 (南) 人骨集中区は、成人が 7 割以上を占め、年齢による大きな偏りがみられる。例えば第 4・5・7 人骨集中区は成人だけが埋葬されていた。両者の差から、第 1・8・10 (北) 人骨集中区は家族墓であった可能性が高いといえる。第 6 人骨集中

区は未成人が全体の6割を占め、第2・9人骨集中区も成人が6割を占めるという点では年齢の偏りがみられる。しかし、上述の傾向をふまえると、いずれも家族墓と考える方が妥当であるといえよう。

3. テル・アイン・エル・ケルク遺跡の墓地からみる親族関係

アイン・エル・ケルクの墓地について分析を進めてきた結果、アイン・エル・ケルクの墓地から検出された合葬墓の中のいくつかは、家族墓である可能性が強いことを示すことが出来た。最後に、これらの埋葬例からアイン・エル・ケルクの親族関係について考察を試みる。

(1) 婚姻関係

臼歯に蓄積されるストロンチウムの値は臼歯が形成される4～12歳までに生活していた環境によって値が決まり、それ以後は変化しないといわれている (Bentley 2006)。そのため、異なる居住環境の地域から12歳以後に移入してきた人は、在地の人々と異なる値を示す。アイン・エル・ケルクで発掘された人骨を基に板橋氏が行ったストロンチウム同位体比分析によると、12～15歳の準成人1体と7～8歳の小児1体を除き、全ての個体が在地の値を示したという⁷⁾。これは、異なる居住環境にある他地域からの移入者は認められないことを示す。このことから、当時の婚姻について以下の2つの可能性が指摘される。第一に、集落内で婚姻関係を結んでいた場合。第二に、同じ居住環境にある近くの集落との間で婚姻関係を結んでいた場合である。ストロンチウム同位体比分析からは、夫方居住婚と妻方居住婚のどちらであったのか、ということを知ることは出来ない。

(2) 家族の規模

次に家族の規模を考えてみる。この時代における家族の規模については、住居を単位とした世帯規模の研究から迫ることが出来る。住居の規模やプランから先土器新石器時代B期までの世帯は核家族であったと考えられている (Banning and Byrd 1987; Byrd 2000)。その後、先土器新石器時代B期の後期から土器新石器時代の初めにかけて住居の規模が拡大したとみられる (Byrd 2000)。先土器新石器時代B期の後期になると、それまでは住居の外に位置し、共用だった炉がそれぞれの住居内に作られ、食糧も共用の倉庫からそれぞれの住居内で保管するようになった。また、2階建ての住居なども出現し、この時代に世帯の自立性が高まっていったとみられる (門脇 2009)。

これらを踏まえてアイン・エル・ケルクから検出された住居をみてみると、墓地と同じ層位から検出される住居で最も一般的なものは6m × 6mの方形プランをもつ住居である。住居内は、床にプラスターが貼られた大きな部屋といくつかの小部屋に分けられている (Tsuneki and Jamar 2009)。プラスターの貼られた大きな部屋がおそらく居住用の部屋であり、小部屋は調理や食糧の備蓄に使われていたと思われる。また、住居とは別に共用の調理場であったと思わ

れるような建物も検出されており (Tsuneki and Jamar 2009)、核家族と拡大家族どちらとも捉えられるような住居址がみられる。

(3) 家系の復元 (家族構成) —第 10 人骨集中区より

前節でも論じたように、第 1・2・8・10 (北) 人骨集中区は性別と年齢に偏りがみられず、その年齢・性別構成も墓地全体の構成と似ている。合葬墓に埋葬されている人々には血縁関係があるという前提に基づくと、これらは当時の家族構成を反映している可能性が考えられる。そこで、埋葬された順序が明確である第 10 人骨集中区北側の集積において、埋葬順序と性別・年齢をもとに家系図の復元を試みた。第 10 人骨集中区の北側は一次葬が中心の合葬墓であり、埋葬順序を復元することが可能である。間に 2 つの間層をはさみ、少なくとも 3 つの時期に分けて埋葬が行われたことも明らかである (第 13 図)。一次葬の個体を埋葬した際には、前に埋葬された個体を端に片付けた形跡もみられ、明らかにこの場所を意識して埋葬を行っていたことが感じられる。家系の復元は、2 つの間層が 1 つの世代の区切りと仮定し、成人の兄弟姉妹が同じ墓に入る場合と入らない場合の大きく 2 つのパターンに分けて行った。

まずはパターン 1 として、成人の兄弟姉妹は同じ墓に入らない、という前提を基に家系図の復元を行った (第 14 図①)。この場合母系・父系どちらの可能性もあり、また一 가족の規模は 4～5 人ほどであったと想定される。世代は成人の数から多くて 5 世代ほどと想定でき、またアイン・エル・ケルクにおける平均寿命がおそらく 30 歳前半であることを考えると、この合葬墓は約 100 年の間利用されていたと推定することが出来る。

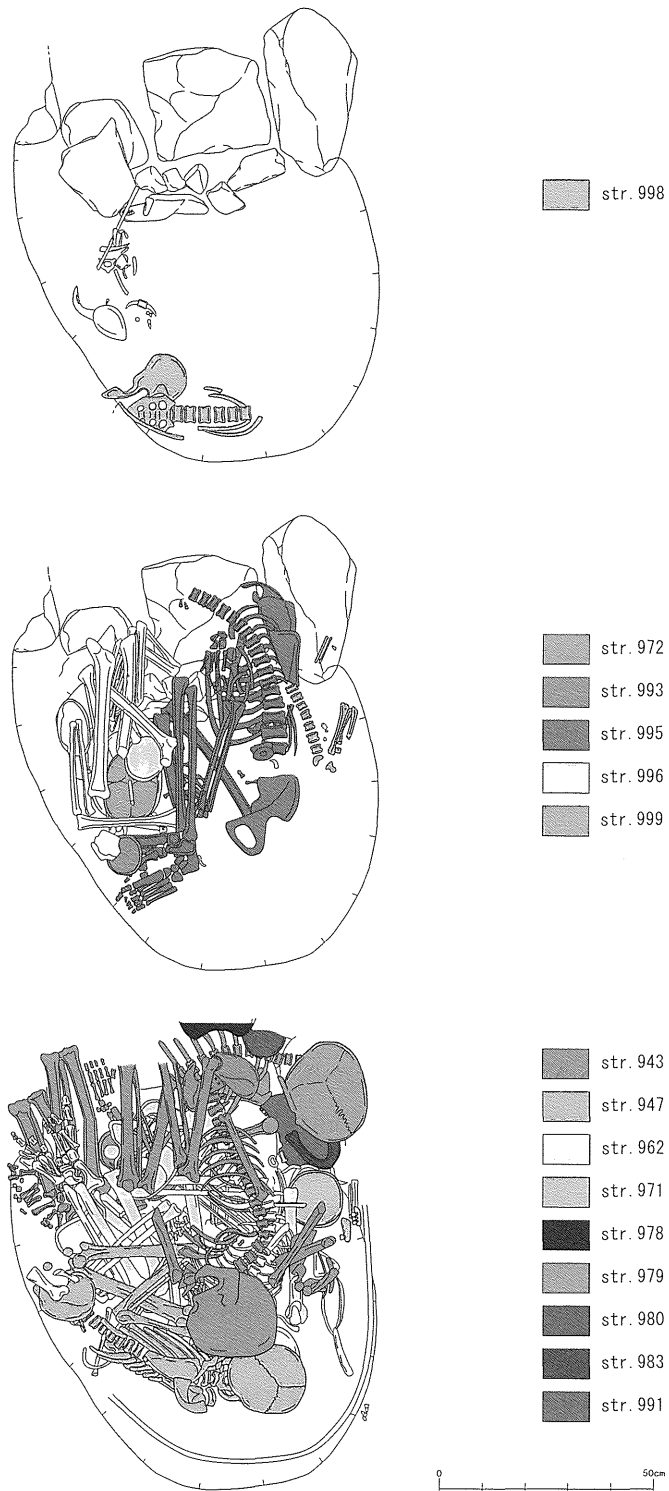
次にパターン 2 として、成人の兄弟姉妹が同じ墓に入る、という前提をもとに家系図の復元を行った (第 14 図②)。この場合も女系・男系どちらの可能性も考えられる。一 가족の規模は 5～6 人であったと考えられる。世代は 3 世代が想定され、およそ 60 年間この合葬墓は利用されていたと考えられる。また、いずれのパターンでも、子供の数は一夫婦に 3～4 人であったと推定出来る。

(4) まとめ

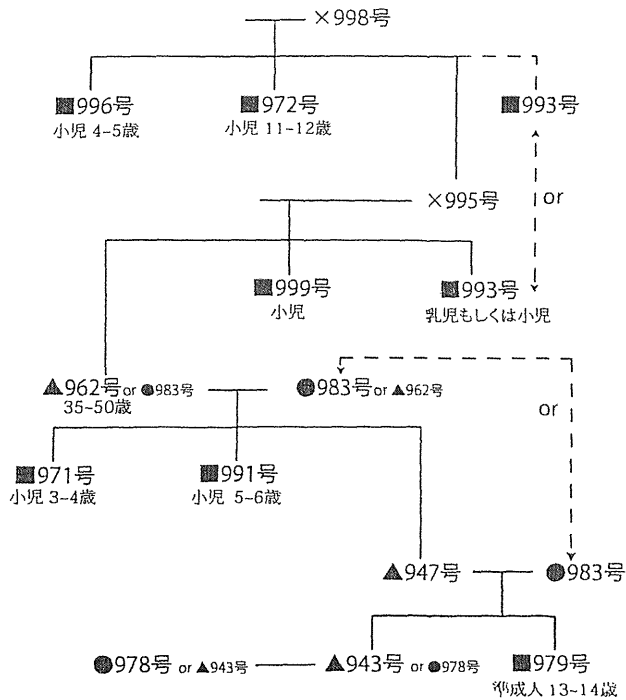
アイン・エル・ケルクの墓地から当時の親族関係について考察を行うと、まず婚姻関係については、ストロンチウム同位体比分析から、婚姻は集落内、もしくは同じ居住環境にあるような近くの集落との間で行われていたということが明らかになった。しかし、夫方居住婚と妻方居住婚のどちらであったのかは現段階では不明である。

次に家族の規模を考えると、住居址からは核家族と拡大家族のどちらの可能性もあり得ることが推測された。第 10 人骨集中区北側の合葬墓から家系図の復元を行うと、一 가족は 4～6 人であったと想定され、合葬墓はおおよそ 60～100 年間にわたって利用されていたと推測することが出来る。ただし、核家族だったのか拡大家族であったのかは確定出来なかった。

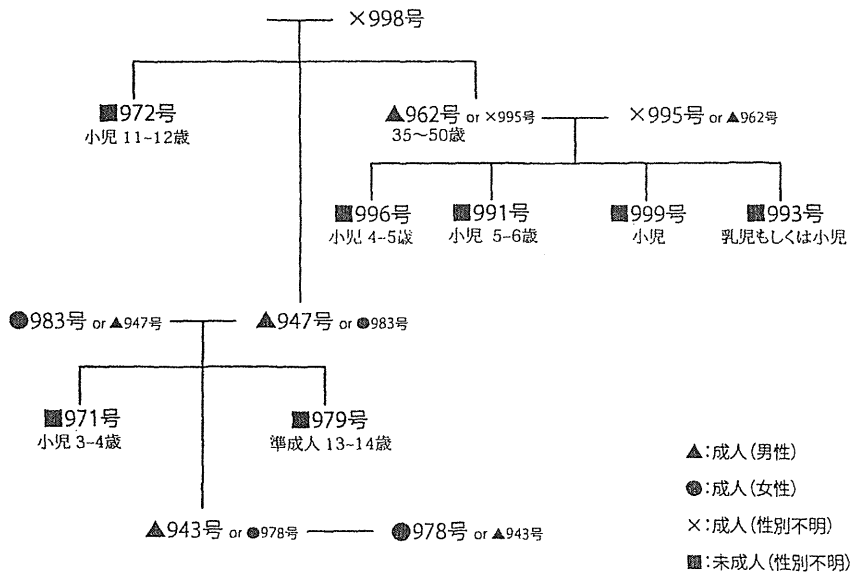
以上の結果から当時のアイン・エル・ケルクにおける親族関係については、次の 4 点を指摘



第13図 第10人骨集中区北側における埋葬状態
(上から第1期, 第2期, 第3期)



1. 家系図パターン①



2. 家系図パターン②

第14図 第10人骨集中区から復元しうる二つの家系パターン

することが出来る。まずは、当時の一家族の規模は4～6人程度であること。2点目は、子供の数は一夫婦につき3～4人ほどであること。3点目は、婚姻は集落内もしくは近くの集落との間で行っていたこと。そして4点目は、社会において血縁関係が強く意識され、それは埋葬する場所に反映された、ということである。

IV. おわりに

アイン・エル・ケルクの墓地から出土した200体余りの埋葬例について分析した結果、性別と年齢の構成、性別や年齢による墓域の区別や埋葬姿勢の違いなどについて大きな違いは見受けられず、この墓地は集落の共同墓地であり、当時の集落構成を反映していると考えられた。アイン・エル・ケルクの墓地における特徴の1つとして、人骨集中区と呼ばれる場所に複数体分の人骨を合葬する葬法が一般的に行われていたことが明らかになった。これらの合葬墓が意味することを考えるために、他の遺跡の合葬墓と比較を行った。

他の遺跡から検出された合葬墓の事例をみると、追葬を繰り返しながら一ヶ所に埋葬されている人々の間には血縁関係がある可能性が高いことが示された。さらに、アイン・エル・ケルクの墓地出土人骨の炭素・窒素同位体比分析の結果、家族ごとにまとまって埋葬されている可能性があるため、アイン・エル・ケルクの合葬墓に埋葬されている人々は互いに血縁関係がある可能性が高いと推測した。合葬墓の中には性別・年齢の構成が墓地全体の構成と近いものがいくつか見受けられ、それらはすなわち家族を示すのではないかとと思われる。

本稿では、アイン・エル・ケルクの人骨集中区に埋葬されている人々が家族である可能性が高いということが指摘されたが、親族関係という血縁と深く関わるテーマは考古資料のみでは仮定の域に留まり、それ以上の追究は極めて困難であるということが強く実感させられた。今後はまずアイン・エル・ケルク出土人骨の形態的特徴から血縁関係を推定するとともに、今回は不十分であった副葬品についての検討など考古資料の分析を深め、民族誌も利用しながら、今回立てた仮説について検証を進めていきたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり指導教官である常木晃先生をはじめ多くの先生方、考古学研究室の先輩方に多くのご指導とご教示を賜りました。また、学部生の皆さんには図版の作成にご協力頂きました。末筆ながら深く感謝申し上げます。本稿では筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団の許可を得て、テル・アイン・エル・ケルク遺跡出土資料を使用させて頂きました。未発表資料の使用を快く許可して下さいった調査団長の常木晃先生と調査団メンバーの方々に改めて感謝申し上げます。

尚、本稿で述べた見解は調査隊の正式な見解ではなく、あくまでも筆者個人の見解であることを申し添えます。

註

- 1) 2008 年までの調査成果に関しては村上尚子氏が分類・整理を行っている（村上：2008a, b）。
- 2) 年齢区分は、胎児（妊娠 9 か月未満）、周産児（産前 1 ヶ月～産後 1 ヶ月）、乳児（0 ～ 1 歳）、小児（1 ～ 12 歳）、準成人（12 ～ 20 歳）、若年の成人（20 ～ 35 歳）、中年の成人（35 ～ 50 歳）、老年の成人（50 歳以上）とする（Dougherty 2009）。
- 3) 方角は全て 5 度刻みで計測し、0 度を真北と据え、337.5 ～ 22.5 度が北、22.5 ～ 67.5 度が北東、67.5 ～ 112.5 度が東、112.5 ～ 157.5 度が南東、157.5 ～ 202.5 度が南、202.5 ～ 247.5 度が南西、247.5 ～ 292.5 度が西、そして 292.5 ～ 337.5 度が北東とした。
- 4) 本文の図表に引用文献が付していないものは、筆者が作成・作図したものである。また、写真に引用文献が付していないものは、テル・エル・ケルク調査団所有のものを使用した。
- 5) 第 10 人骨集中区の南側の集積は骨の周りの土が焼けていないため正確には火葬土坑ではないが、第 3 ・ 4 人骨集中区のように骨が互いに密に積み重なるというよりも、骨が全て欠片となり散布している状態が火葬土坑のものと類似しているため、火葬土坑とともに分類した。
- 6) コックニューの主張に対しアッカーマンス（P. M. M. G Akkermans）らは、二次葬は定住・遊動を問わず様々な社会でみられる習慣であるとして疑問を呈している（Akkermans and Schwartz 2003）。
- 7) 2011 年 12 月 16 日筑波大学にて開催された「筑波大学プレ戦略イニシアティブ・西アジア文明研究センターの構築・国際シンポジウム『死を悼む心・葬制から見る西アジア先史時代の社会・』」において板橋悠氏が発表した“Multi Isotopic Evidence for Dietary and Immigrant Signatures of Mortuary Bones at Tell Ain el-Kerkh”に基づく。

参考文献

- Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz 2003 *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-Gathers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300BC)*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Andrews, P., Molleson, T. and B. Boz 2005 The Human Burials at Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Inhabiting Çatalhöyük: Reports from the 1995-1999 Seasons*. Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research, pp. 261-278.
- Baca, M. and M. Molak 2008 Research on Ancient DNA in the Near East. *Bioarchaeology of the Near East* 2, pp. 39-61.
- Banning, E. B. and B. F. Byrd 1987 Houses and the Changing Residential Unit: Domestic Architecture at PPNB 'Ain Ghazal, Jordan. *Proceedings of the Prehistoric Society* 53, pp. 309-325.
- Bentley, A. R. 2006 Strontium Isotopes from the Earth to the Archaeological Skeleton: A Review. *Journal of Archaeological Method and Theory* 13, pp. 135-187.
- Byrd, B. F. 2000 Households in Transition. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*. Norwell, Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp. 63-102.
- Coqueugnot, E. 1999 Tell Dja'deel-Mughara. In G. de O. Late and J. L. M. Fenollós (eds.), *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates, the Tishrin Dam Area*. Barcelona, Editorial AUSA, pp. 41-55.
- Cornwall, W. I. 1981 Appendix A: The Pre-pottery Neolithic Burials. In K. M. Kenyon (ed.), *Excavations at Jericho, Vol. III: The Architecture and Stratigraphy of the Tell*. London, British School of Archaeology in Jerusalem, pp. 395-406.
- Dougherty, P. S. 2008 Human Remains. In A. Tsuneki and H. Jamal (eds.), *The Excavations at Tell el-Kerkh 2008*. Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba, pp. 26-29.
- Dougherty, P. S. 2009 Human Remains, 2009. In A. Tsuneki and H. Jamal (eds.) *The Excavations at Tell el-Kerkh 2009*. Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba, pp. 21-25.
- Dougherty, P. S. 2010 Human Remains, 2010. In A. Tsuneki and H. Jamal (eds.) *The Excavations at Tell el-Kerkh 2010*.

- Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba, pp. 29-33.
- During, B. S. 2003 Burials in Context: The 1960s Inhumations of Çatalhöyük East. *Anatolian Studies* 53, pp. 1-15.
- Fernandez, E., Ortiz, J., Torres, T., Pérez-Pérez, A., Gamba, C., Tirado, M., Baeza, C., Lopezparra, A. M., Turbon, D., Anfruns, J., Molist, M. and E. Arroyo-Pardo 2008 Mitochondrial DNA Genetic Relationships at the Ancient Neolithic Site of Tell Halula. *Forensic Science International: Genetics Supplement Series* 1, pp. 271-273.
- Gauld, S., Campbell, S. and E. Carter 2003 Elusive Complexity: New Data from Late Halaf Domuztepe in South Central Turkey. *Paléorient* 29-2, pp. 117-133.
- Gebel, H. G. K. and B. D. Hermansen 2000 The 2000 Season at Late PPNB Ba'ja. *Neo-Lithics* 2-3/00, pp. 20-22.
- Gebel, H. G. K. and B. D. Hermansen 2001 LPPNB Ba'ja 2001. A Short Note. *Neo-Lithics* 2/01, pp. 15-20.
- Gebel, H. G. K., Hermansen, B. D. and K. Moritz 2006 Ba'ja 2005: A Two-Storied Building and Collective Burials. Results of the 6th Season of Excavation. *Neo-Lithics* 1/06, pp. 12-19.
- Hodder, I. (ed.) 2007 *Excavating Çatalhöyük: South, North and KOPAL Area Reports from the 1995-99 Seasons*. Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research.
- Iwasaki, T. and A. Tsuneki (eds.) 2003 *Archaeology of the Rouj Basin. A Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria. Vol. I*. Tsukuba, University of Tsukuba.
- Iwasaki, T., Nishino, H. and A. Tsuneki (eds.) 1995 The prehistory of the Rouj Basin, Northwest Syria, a Preliminary Report. *Anatolica* 21, pp. 143-187.
- Kansa, S. W., Gauld, S. C., Campbell, S. and E. Carter 2009 Whose Bones are Those? Preliminary Comparative Analysis of Fragmented Human and Animal Bones in the "Death Pit" at Domuztepe, a Late Neolithic Settlement in Southeastern Turkey. *Anthropozoologica* 44-1, pp. 159-172.
- Kenyon, K. M. 1981 *Excavations at Jericho, Vol.III: The Architecture and Stratigraphy of the Tell*. London, British School of Archaeology in Jerusalem.
- Kuijt, I. 1996 Negotiating Equality through Ritual: A Consideration of Late Natufian and Prepottery Neolithic A: Period Mortuary Practices. *Journal of Anthropological Archaeology* 15, pp. 313-336.
- Kuijt, I., Guerrero, E., Molist, M. and J. Anfruns 2011 The changing Neolithic Household: Household Autonomy and Social Segmentation, Tell Halula, Syria. *Journal of Anthropological Archaeology* 30-4, pp. 1-21.
- Mekel-Brobov, H. and B. Lahm 2004 Ancient DNA Analysis of Human Remains From Tell Kurdu. In R. Özbal and F. Gerritsen (et al.), *Tell Kurdu Excavations 2001*. *Anatolica* 30, pp. 37-107.
- Mellaart, J. 1962 Excavations at Çatalhöyük: First Preliminary Report, 1961. *Anatolian Studies* 12, pp. 41-65.
- Molleson, T. I. 2000 The People of Abu Hureyra. In A. M. T. Moore, G.C. Hillman and A. J. Legge (eds.), *From Foraging to Farming at Abu Hureyra*. Oxford, Oxford University Press, pp. 277-299.
- Molleson, T., Andrews, P. and B. Başak 2005 Reconstruction of the Neolithic People of Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Inhabiting Çatalhöyük: Reports from the 1995-1999 Seasons*. Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research, pp. 279-300.
- Moore, A. M. T. and T. I. Molleson 2000 Disposal of the Dead. In A. M. T. Moore, G. C. Hillman and A. J. Legge (eds.) *From Foraging to Farming at Abu Hureyra*. Oxford, Oxford University Press, pp. 277-299.
- Özbek, M. 1988 Culte des crânes humains à Çayönü. *Anatolica* 15, pp. 127-138.
- Özdoğan, A. 1999a Çayönü. In M. Özdoğan and N. Başgelen (eds.), *Neolithic in Turkey: The Cradle of Civilization; New Discoveries, Text*. Istanbul, Arkeolojive Sanat Yayınları, pp. 35-63.
- Özdoğan, A. 1999b Çayönü. In M. Özdoğan and N. Başgelen (eds.), *Neolithic in Turkey: The Cradle of Civilization; New Discoveries, Plates*. Istanbul, Arkeolojive Sanat Yayınları, pp. 19-35.

- Pilloud, M. A. and C. S. Larsen 2011 "Official" and "Practical" Kin: Inferring Social and Community Structure from Dental Phenotype at Neolithic Çatalhöyük, Turkey. *American journal of physical anthropology* 145, pp. 519-530.
- Stordeur, D., Khawam, R., Jammous, B. and Morero, E. 2006 L'aire Funéraire de Tell Aswad (PPNB). *Syria* 83, pp. 39-62.
- Tobler, A. J. 1950 *Excavations at Tepe Gawra, Vol. II*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Tsuneki, A. and H. Jamal 2007 *The Excavations at Tell el-Kerkh 2007*. Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba.
- Tsuneki, A. and H. Jamal 2008 *The Excavations at Tell el-Kerkh 2008*. Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba.
- Tsuneki, A. and H. Jamal 2009 *The Excavations at Tell el-Kerkh 2009*. Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba.
- Tsuneki, A. and H. Jamal 2010 *The Excavations at Tell el-Kerkh 2010*. Damascus, Directorate-General of Antiquities and Museums and University of Tsukuba.
- Tsuneki, A. 2010 A Newly Discovered Neolithic Cemetery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria. In P. Matthiae, F. Pinnock, L. Nigro and N. Marchetti (eds.), *Proceedings of the 6th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, May, 5th–10th 2009. "Sapienza" – Università di Roma. Volume 2. Harrasowitz Verlag, Wiesbaden*, pp. 697–713.
- 門脇誠二 2009 「西アジア新石器集落の崩壊と再編成—一世帯からの展望—」西秋良宏・木内智康（編）『農耕と都市の発生—西アジア考古学最前線—』同成社 61-98 頁。
- 筑波大学シリア考古学調査団 編 1993 『筑波大学シリア考古学調査団報告 3 エル・ルージュ盆地における考古学的調査 III』筑波大学歴史人類学系。
- 筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団 2011 『ケルク新石器時代墓地にみる生と死』筑波大学先史学・考古学コース。
- ドーティー・S.・P. 2011 「人骨にみる病と死」筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団『ケルク新石器時代墓地にみる生と死』筑波大学先史学・考古学コース 27-30 頁。
- 村上尚子 2008a 「テル・アイン・エル・ケルクの新石器時代の墓地の位置づけ」『史境』第 56 号 103-118 頁。
- 村上尚子 2008b 『西アジア新石器時代の葬送の変遷』筑波大学大学院博士課程。人文社会科学研究科修士論文。
- ラドクリフ＝ブラウン・A. R. 2002 『未開社会における構造と機能』（青柳まちこ訳）新泉社。

第1表 人骨集中区 出土人骨一覧

集中区	号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考	
1	716	E271b	東	南	左側臥屈葬	おそらく男性	成人	-	一次葬	
	717		-	-	-	-	小児 (0～2歳)		集骨葬（頭蓋骨のみ）	
	718		①	-	南西	-	おそらく男性		若年の成人	集骨葬（頭蓋骨・脚の骨など）
			②	-	-	-	-		乳児	集骨葬（頭蓋骨・脚の骨など）
	719		-	東	-	-	小児 (1～2歳)		集骨葬（頭蓋骨・その他の骨）	
	720		①	-	-	-	おそらく男性		成人	集骨葬（下顎骨のみ）
			②				-		成人 (中年?)	集骨葬
			③				-		成人 (若年?)	集骨葬
	721		-	上	-	-	準成人 (12～14歳)		集骨葬（頭蓋骨のみ）	
	722		-	上	-	男性	成人 (中年?)		集骨葬（頭蓋骨のみ）	
	740		-	西	-	-	小児 (10～12歳)		集骨葬（頭蓋骨のみ）	
	741		-	南西	-	-	小児 (5～7歳)		集骨葬（頭蓋骨のみ）	
	742		-	西	-	-	小児 (6～8歳)		集骨葬（頭蓋骨のみ）	
	743		-	北東	-	-	中年の成人		集骨葬（頭蓋骨・腕の骨のみ）	
2	711	E271b	東	-	右側臥屈葬	-	準成人 (15～18歳)	-	一次葬（頭蓋骨は無い）	
	714		南西	-	左側臥屈葬	おそらく男性	成人	貝製ビーズ (2点)	一次葬	
	731		東	南西	仰臥屈葬	おそらく男性	成人	石製ビーズ (1点)	一次葬	
	732		北	地面	伏臥屈葬	-	準成人 (12～15歳)	ウシの手足骨 (1点)	一次葬	
	737		-	西	-	おそらく男性	成人	-	集骨葬（頭蓋骨、足の骨）	
	746		①	-	北	-	-	小児 (1～2歳)	-	火葬（頭蓋骨とその他の骨）
			②	-	-		-	小児 (6～8歳)	-	火葬（頭蓋骨のみ）
	751		-	-	-	-	小児 (5～6歳)	石製スタンプ 印章（1点） 石製ビーズ (2点)	攪乱された一次葬 (頭蓋骨、寛骨のみ)	
	752		北西	-	右側臥屈葬	おそらく女性	成人	-	一次葬（頭蓋骨は無い）	
	756		-	-	-	-	小児	-	集骨葬（頭蓋骨のみ）	
3	831 847 848 850	E271b ～ E251d	-	-	-	男性	成人	-	集骨葬と火葬	
	男性					成人				
	男性					成人				
	男性					成人				
	女性					成人				
	女性					成人				
	-					小児				
	854					-	-			-
	-		①	-	東	-	未鑑定	未鑑定	石製ビーズ (1点) 円盤型の土製品 (1点)	集骨葬と火葬
			②		-					
			③		-					
			④		上					
			⑤		-					
			⑥		南西					
			⑦		上					
			⑧		西					
			⑨		-					

テル・アイン・エル・ケルク遺跡からみる親族関係

集中区	号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考	
4	833	E271b	-	-	-	①男性 ②男性 ③男性 ④女性 ⑤女性 ⑥女性	①中年の成人	-	集骨葬と火葬	
	839						②若年の成人	-		
	845						③-	石製ビーズ (3点) 貝製ビーズ (2点)		
	846						④老年の成人	-		
	853						⑤若年の成人	-		
	859						⑥-	-		
	5						842	E271b		-
855		-	-	-	おそらく男性	若年の成人	火葬 (頭蓋骨・下顎骨のみ)			
856					おそらく女性	成人	火葬 (頭蓋骨のみ)			
857					おそらく男性	若年の成人	火葬 (頭蓋骨のみ)			
848					おそらく女性	成人	火葬 (頭蓋骨のみ)			
6	865 866 867 868	E271d	-	-	-	女性	成人	暗色磨研土器 (1点) ※	火葬 (頭蓋骨のみ)	
	女性					成人				
	-					成人				
						小児 (4～5歳)				
						小児				
						小児				
	7					860	E271b			-
861		-	東	左側臥屈葬	おそらく女性	若年の成人		-	攪乱を受けた一次葬 粗製土器が被せられていた	
862		東	南東	右側臥屈葬	おそらく女性	成人		暗色磨研土器 (1点)	一次葬 動物の下顎骨が共伴	
863		南東	南東	伏臥屈葬	おそらく女性	成人		石製ビーズ (1点)	一次葬	
8	869 870 871 ① 871 ② 873 874 875	E271 b,d	-	-	-	-	乳児	ドリル (2点) ※	火葬	
	小児									
	小児									
	準成人									
	老年の成人									
	成人									
	成人									
9	919	E271b	-	-	-	-	おそらく男性	成人	-	火葬
	①						準成人 (16歳未満)			
	②						小児			
	③						成人			
	④						成人			
⑤	成人									

集中区		号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考
10	北	943	E271b ～ E271d	西	北	左側臥屈葬	おそらく男性	成人	フリントのブレード (1点)	一次葬
		947		北西	地面	伏臥屈葬	おそらく男性	成人	円盤型の土製品 (2点)	一次葬
		962		西	北	伏臥屈葬	男性	中年の成人	-	一次葬
		971		-	ほぼ真上	-	-	小児 (3～4歳)	-	集骨葬 (頭蓋骨のみ)
		972		-	東	-	-	小児 (11～12歳)	石製ビーズ (1点) スタンプ印章 (1点) *	集骨葬 (頭蓋骨のみ)
		978		-	北	-	おそらく女性	成人	-	集骨葬 (頭蓋骨のみ)
		979		南	地面	左側臥屈葬	-	準成人 (12～13歳)	-	一次葬
		980		-	-	-	-	-	-	頭蓋骨のみ確認
		983		-	-	-	おそらく女性	-	-	下顎骨のない頭蓋骨
		991		-	東	-	-	小児 (5～6歳)	-	下顎骨のない頭蓋骨
		993		-	-	-	-	乳児もしくは小児	-	集骨葬 (頭蓋骨のみ)
		995		東	-	右側臥屈葬	-	成人	動物の牙 (1点) スタンプ印章 (1点)	攪乱を受けた一次葬 (頭蓋骨・左寛骨・左大腿骨が無い)
		996		-	-	-	-	小児 (4～5歳)	-	集骨葬 (下顎骨のみ)
	998	南?	-	-	-	成人	-	攪乱を受けた一次葬 (寛骨・肋骨・椎骨の一部のみ)		
	999	東?	-	-	-	小児	石製ビーズ (3点)	攪乱を受けた一次葬 (椎骨・寛骨・大腿骨のみ)		
南	953	-	-	-	-	成人	-	攪乱された一次葬 (膝から下のみ)		
	焼骨	-	-	-	-	周産児	暗色磨研土器 (1点) ※	火葬		
		小児								
		成人								
		成人								
		成人								

※ 人骨集中区全体に帰属する副葬品。

* 出土した位置が 995 号人骨の左足付近であったので、995 号人骨に副葬されていた可能性も考えられる。

第2表 集中区以外の埋葬

号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考
502	E271c	南西	上	左側臥屈葬	－	小児 (2～3歳)	－	一次葬
504	E271c	－	－	－	－	周産児	－	攪乱 (頭蓋骨、下顎骨など出土)
521	E271c	西	地面	左側臥屈葬	－	準成人 (12～15歳)	－	一次葬
524	E271c	南東	南西	左側臥屈葬	おそらく 女性	中年の成人	－	一次葬
527	E271c	－	北西	右側臥屈 葬？	－	乳児 (0～3カ月)	－	一次葬
528	E271c	－	－	－	－	小児 (1～3歳)	－	攪乱 (歯や四肢骨など出土)
533	E271c	北	地面	伏臥屈葬	女性	中年の成人 (40～50歳)	－	一次葬
710	E271d	－	西	－	おそらく 男性	中年の成人	－	集骨葬 (頭蓋骨、脚の骨が出土)
712	E271d	南東	地面	右側臥屈葬	おそらく 女性	中年の成人	－	一次葬
713	E271b	北西	北東	左側臥屈葬	－	小児 (10～12歳)	－	一次葬
715	E271d	北	西	右側臥屈葬	おそらく 男性	成人	石製容器 (1点) 貝製ビーズ (1点)	一次葬
725	E271d	北	南	仰臥屈葬	おそらく 女性	若年の成人	－	一次葬
726	E271d	西	南西	右側臥屈葬	－	乳児 (9～18カ月)	－	一次葬
729	E271d	北	南	仰臥屈葬	おそらく 女性	若年の成人	石製スタンプ 印章 (1点)	一次葬
730	E271d	－	－	－	－	小児 (2～3歳)	－	攪乱された一次葬 (寛骨、椎骨など出土)
738	E271b	西	南	右側臥屈葬	－	乳児 (0～3カ月)	－	一次葬
739	E271b	北東	南西	右側臥屈葬	おそらく 男性	中年の成人	ビーズ (7点) ・土製 (3点) ・石製 (1点) ・貝製 (2点)	一次葬
748	①	E271b	北西	地面	仰臥屈葬	おそらく 男性	石製ビーズ (1点) ドリル (1点)	一次葬
	②		－	－	－	小児 (1～2歳)		
	③		－	－	－	乳児		
750	E271d	北西	－	仰臥屈葬	－	小児 (5～6歳)	－	一次葬
757	E271b	南	北東	右側臥屈葬	－	小児 (7～8歳)	骨製突錐 (1点)	一次葬
803	E271b	西	上	－	おそらく 女性	成人	骨製ビーズ (1点) 巻貝 (1点)	一次葬
807	E291b	北	上	仰臥屈葬	－	中年の成人 (35～40歳)	石製ビーズ (1点) フリント製 ドリル (1点)	一次葬、プラスター貼り
810	E311b	－	地面	－	おそらく 男性	準成人 (14～16歳)	－	頭蓋骨より下の部分は東 壁にかかってしまってい たため、頭蓋骨のみ取り 上げ。
822	E271b	－	－	－	－	小児 (8～10歳)	ビーズ (20点) ・土製 (19点) ・貝製 (1点)	攪乱された二次葬 (指骨、 歯、脊椎骨の一部出土)
823	E271b	北	南東	左側臥屈葬	－	準成人 (14～16歳)	貝製ビーズ (1点) 骨針 (1点)	一次葬

宮内優子

号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考
825	E271b	-	-	-	-	小児 (10～12歳)	-	攪乱された一次葬(長骨、 寛骨、指骨の一部出土)
826	E271b	北東	南東	左側臥屈葬	-	準成人 (14～15歳)	-	一次葬
828	E271d	北東	北西	右側臥屈葬	-	胎児	-	一次葬
829	E271b	西	東	左側臥屈葬	-	小児 (2～3歳)	-	一次葬
830	E271b	北西	南西	右側臥屈葬	おそらく 男性	成人	石製ビーズ (1点)	一次葬
832	① ② ③ ④ ⑤	E271d	-	-	-	乳児	暗色磨研土器 (1点) ・石製(7点) ・石製(6点) ・貝製(1点)	集骨葬(肋骨、頭蓋骨、 脊椎骨、指骨の一部出土)
						小児 (10～12歳)		
						小児		
						成人		
						成人		
834	E271b	北西	北東	左側臥屈葬	-	小児 (2～3歳)	-	一次葬
836	E271b	西	北	左側臥屈葬	男性	中年の成人	巻貝(1点)	一次葬
838	E271b	西	-	左側臥屈葬	-	周産児	-	一次葬
841	E271b	南東	-	仰臥屈葬	-	周産児	-	一次葬
851	①	E271b	-	-	-	乳児 (10～12カ 月)	貝製ビーズ (1点)	攪乱された一次葬(頭蓋 骨、寛骨などが一部出土)
	②					成人		
852	①	E271b	-	-	おそらく 男性	成人	-	攪乱された一次葬 (下顎骨など一部出土)
	②				-	小児 (1～2歳)		
901	E271c	東	地面	左側臥屈葬	-	周産児	-	109号住居の床下埋葬 攪乱された一次葬
902	E271a	-	-	-	-	小児 (1～2歳)?	-	攪乱された一次葬 (頭蓋骨の一部のみ)
904	E271a	南西	北	左側臥屈葬	おそらく 男性	若年の成人 (30～35 歳?)	-	一次葬
908	E271c	東	南西	仰臥屈葬	-	準成人 (11～13歳)	-	827号住居の床下埋葬? 一次葬
909	E271a	北東	南	左側臥屈葬	おそらく 女性	若年の成人	石製スタンプ 印章(1点)	一次葬
910	①	E271a	-	-	-	成人	-	攪乱された二次葬か? (頭蓋骨の一部、長骨、指 骨など出土)
	②					成人		
	③					乳児 (6カ月～1歳)		
911	E271a	北西	-	仰臥屈葬	-	新生児 (0～1カ月)	-	一次葬
912	E271a	-	-	-	-	乳児	-	攪乱された一次葬 (頭蓋骨のみ出土)
913	E271a	北東	北	伏臥屈葬	-	小児 (1～1.5歳)	石製ビーズ (20点)	一次葬
914	E271b	東	-	右側臥屈葬	-	小児 (3～4歳)	石製ビーズ (8点)	一次葬
918	E270b	-	東・地面	右側臥屈葬	-	乳児 (4～6カ月)	-	一次葬
920	E271a	南東	南東	左側臥屈葬	-	小児 (3～4歳)	-	一次葬
921	E271b	南	西	左側臥屈葬	男性	若年の成人 (30～35歳)	-	一次葬
922	E271b	-	-	-	-	成人	ビーズ(3点) ・石製2点 ・貝製1点	攪乱された一次葬 (手と足の一部のみ出土)
924	E271b	東	南	左側臥屈葬	女性	若年の成人	貝製ビーズ (1点)	一次葬 916号住居と824号住居の 間にある通路から出土

テル・アイン・エル・ケルク遺跡からみる親族関係

号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考
925	E271b	北西	—	左側臥屈葬	—	胎児	—	一次葬
926	E270a	北	—	右側臥屈葬	おそらく女性	成人	ビーズ (7点) ・貝製 (4点) ・骨製 (2点) ・石製 (1点)	頭蓋骨はなし
927	E270b	—	—	右側臥屈葬	—	胎児	暗色磨研土器 (1点) ビーズ (6点) ・トルコ石 (1点) ・瑪瑙 (1点) ・石灰石 (1点) ・貝製 (1点) ・骨製 (2点)	同時埋葬か？ モグラなどの動物により全体的に攪乱を受けている。 ②は攪乱を受けているため、姿勢などは不明。 ③の上半身は攪乱を受け、頭蓋骨は検出されなかった。
					—	小児 (4～5歳)		
					女性	若年の成人 (30～40歳)		
930	E270b	—	東	—	おそらく女性	若年の成人	—	動物骨と人骨が混在。二次葬か？ ①頭蓋骨・下顎骨のみ ②頭蓋骨・下顎骨のみ ③頭蓋骨の一部のみ
		—	北東		女性	若年の成人		
		—	—		おそらく女性	成人		
931	E271d	—	南	—	—	成人	—	頭蓋骨の一部のみ出土。二次葬か？
932	E271a, b	—	—	—	おそらく男性	—	—	916号住居の床下埋葬。少なくとも6体分の骨が認められる。 ①～③は骨が焼けているが、 ④～⑥は焼けていない。二次葬か？
					—	準成人		
					—	小児		
					—	胎児		
					—	小児		
					おそらく男性	成人？		
933	E271d	北	南西	右側臥屈葬	—	胎児	—	土器被り葬
941	E271d	南東	南西	左側臥屈葬	女性	中年の成人 (30～35歳)	骨製のヘラ (1点) ハンマーストーン (1点) フリント製ポイント (1点) 動物骨 (脛骨？) (1点)	一次葬
942	E271d	—	—	—	—	成人	—	頭蓋骨が調査区東壁にかかっている状態で出土したため、調査区内では全体の確認は出来なかった。
946	E270d	南	東	左側臥屈葬	—	周産児	石英製ビーズ (1点)	109号住居に関連か。攪乱された一次葬
977	E270b	—	—	左側臥屈葬	—	周産児	—	一次葬
981	E270b	—	—	—	—	胎児	—	土器内埋葬
984	E271a	—	上	伏臥屈葬もしくは左側臥屈葬か？	おそらく男性	若年の成人	石製ビーズ (1点) フリントのブレード (1点)	916号住居の床下埋葬。攪乱された一次葬
985	E271a	西	南西	右側臥屈葬	—	小児 (6～7歳)	動物の肩甲骨 (1点) 動物の角 (1点)	916号住居の床下埋葬。攪乱された一次葬
988	E271a	北	地面	右側臥屈葬	女性	中年の成人	骨製のヘラ (1点) 石製ビーズ (1点) 土製ビーズ (1点) ヤギの角 (1点)	916号住居の床下埋葬。一次葬

号人骨	発掘区	頭位方向	顔の向き	姿勢	性別	年齢	副葬品	備考
1040	①	E251c	-	-	-	成人	-	攪乱された一次葬か？ (左腕のみ出土)
	②					小児		攪乱された一次葬か？ (下顎骨のみ出土)
1044	E251c	東	南	左側臥屈葬	男性	おそらく 中年の成人	-	一次葬
1045	E251c	-	-	右側臥屈 葬？	おそらく 男性	成人	-	攪乱された一次葬 (寛骨・脚・肋骨など出土)
1047	E251c	北	西	右側臥屈葬	男性	若年の成人	-	一次葬
1048 (1068)	E251c	-	-	右側臥屈 葬？	-	周産児	-	攪乱された一次葬 (頭蓋骨と胴体が0.8mほど 離れている)
1050	E251c	北西	北東	左側臥屈葬	おそらく 男性	若年の成人	-	一次葬
1051	E251c	南東	南西	左側臥屈葬	女性	中年の成人	-	一次葬
1052	E251c	-	北西	-	-	準成人 (12～13歳)	小形の粗製土 器(1点)	集骨葬
1053	E251c	北東	-	右側臥屈葬	おそらく 男性	成人	石製スタンプ 印章(1点) ビーズ(4点) ・石製2点 ・貝製2点 ヤギの角(1点)	攪乱された一次葬
1056	E251d	南東	西	左側臥屈葬	おそらく 男性	若年の成人	フリントのブ レード(1点)？	一次葬
1057	E251d	東	-	右側臥屈葬	おそらく 女性	成人	-	頭蓋骨がない。 (頭蓋骨はずし？)
1058	E251c	西	南	右側臥屈葬	男性	中年の成人	暗色磨研土器 (1点) 土製スタンプ 印章(1点) フリント製の 斧(3点) 骨製の錐(3点) シカの角(3点) アムークボイ ント(1点) 長いフリント のブレード (5点) 軽石(5点) 砥石(1点) 多数のプリン ト片	一次葬
1059	①	E251c	-	-	-	準成人	-	集骨葬 (寛骨・長骨・椎骨のみ出土) 準成人の骨が主であるが、 一部小児の骨も混じって いた
	②					小児		
1064	E251d	北東	北西	右側臥屈葬	男性	若年の成人 (20歳前後)	貝製ビー(3点)	一次葬
1066	E251c	北	地面	右側臥屈葬	-	小児 (2～3歳)	石製ビー(1点)	一次葬
1067	①	E251c	-	-	-	小児	-	足先のみ出土
	②					成人		
1072	E251c	北東	-	伏臥屈葬	-	小児 (11～12歳)	-	攪乱された一次葬 (頭蓋骨・寛骨より下の部 位が無い)
1073	E251d	-	-	-	-	小児 (1～2歳)	石製ビー(1点)	土器内埋葬 (中の骨は解剖学的位置を 保っていない)

Consideration of kinship at Tell Ain el-Kerkh, Syria

MIYAUCHI, Yuko

More than 240 Neolithic burials were discovered at Tell Ain el-Kerkh, a site located in northwestern Syria. The site of Tell Ain el-Kerkh also yielded graves containing more than one person (mass burials) and we believe that these graves could give us some useful information that would help us to restore the kinship patterns of that time. Therefore the first task we undertook was the positioning of the collected burials within the entire cemetery. Human remains from mass graves do not differ from other human remains found at the site, nor do they deviate from the cemetery average in regard to age and gender. This non-deviation indicates that the whole society used the same cemetery, and the long lasting burial tradition at the same place suggests that blood relatives were buried together. As we look at other Neolithic sites in Western Asia, we can presume that individuals buried in the same grave are somehow blood related. It is also important to note that data from analysis of nitrogen and carbon isotope confirms that people of Tell Ain el-Kerkh who were buried close to each other had eaten the same food. After establishing these patterns I have tried to show the family lineage of the individuals in mass grave no. 10. As a result I was able to determine that at that time the family consisted of 4 to 6 members, and the family plot at Tell Ain el-Kerkh was in use for about 60 to 100 years.